

— 書 評 —

## 貝類学

佐々木 猛智 著

東京大学出版会, 2010 年刊行, 381 ページ

5,670 円 (税込), ISBN978-4-13-060190-0

本書の英文表題が Malacology なので, 本来の邦文表題は「軟体動物概論」であろうが, 実際には本書は軟体動物の中の主に「貝殻をもつ分類群」を扱っている。対象とする読者は学部学生・院生であり, 本書が調べものをする際の簡易な手引き (入門書) となることを目指している。しかし, 評者の判断では, この試みは成功しているとは言い難い。

貝類は甲殻類と並んで, 海洋の底生無脊椎動物の中ではとくに多様性に富む分類群であり, 著者によれば, 貝類学のジェネラリストとしての立場から, 貝類とはなにか, 軟体動物とはなにか, それらの多様性の概説を試みたのが本書である。本書は4章から構成されており, 第1章「軟体動物の系統と分類」(110ページ分), 第2章「貝殻の形態」(70ページ分), 第3章「軟体部の解剖」(90ページ分), 第4章「軟体動物の多様性」(55ページ分)である。第1章は, 軟体動物の位置づけ, その定義と系統関係を扱い, 原始的な軟体動物の各綱, 二枚貝綱, 掘足綱, 頭足綱, 腹足綱と順次に分類学的特徴を簡略に描写している。

第1章の軟体動物の系統関係では, 分岐分類学を踏まえた形態による解析手法, 遺伝子マーカーを使った分子系統による解析手法, 化石を駆使した古生物学的な解析手法に基づく最新の成果が言及されるが, これら3手法それぞれが軟体動物の系統関係の推定においてどのような意義をもつのか, それぞれの手法による推定が相違した場合いずれの結果を尊重するのかの判断根拠, そもそも分類学における分岐分類学の位置づけや分子系統の根拠については, 読者に既知のものとして話が進められているが, 対象読者が学部学生・院生であるとすれば, やはりある程度の解説や具体的な参考文献を挙げておくのが望ましい。第2・3・4章は貝殻や軟体部の多様な形態特徴, 軟体動物の多様性を扱っていて, 鮮やかな見事な図版ともども, 楽しめる概説である。しかし, 第2章では, 幼生殻を含めて, 現在進行しつつあり, また将来的にも

急激な発展が期待される, 貝殻を利用した初期生活史の推定や多彩な生態学的研究の成果についても, 何らかの言及が欲しい。単独の著者に, また入門書としての本書にさらに多くを望むのは酷であるが, 第4章では, 生活史の多様性に加えて, 生物地理学および生態学的な知見に関する言及が著しく不足している。

本書は, 全体の目次配列やその内容から判断すれば, どちらかといえば形態と分類に偏った, いわゆる博物学的な書物である。目次構成から判断すれば, 各章の解説が十分に適切か否かを別にして, 各章の解説が相互に連関をもたず, 全体として本書が「貝類とはなにか, 軟体動物とはなにか」について統一した確としたイメージを読者に喚起するとは思えない。種々の斬新な手法が展開され, さまざまな新知見が急増しつつある最近の研究情勢を勘案すれば, ジェネラリストの見地から軟体動物の入門書 (概説書) を主として分類学や古生物学が専門の著者単独でカバーするのは, いずれにしても困難な時代にあるといえよう。

(関口 秀夫, 三重大生物資源)